１２・翌朝一緒に風邪ひいて、朝から隠れて背徳授乳プレイ

『１１・【耳舐め】雨降るバス停で、騎乗位ぐちゅぐちゅ耳舐めされる』の翌日。
とある年の夏。七月三十日（木）十時ごろ。
日本のとある、かなり寒い地域の田舎町。
天気は雨。今日も激しく振っている。気温は二十四度程度。
少し湿度は高いが、心地よい夏の昼間。

場所は、民宿内、弥映の部屋。
主人公、今日は、伯父伯母公認のもと、弥映の部屋に布団を敷かれ、眠っている。

それはなぜかというと……。
昨日、あの後二人は身体を冷やしたせいですっかり風邪を引き、揃ってダウンしてしまったからだ。

ＳＥ１　雨の環境音
【最初から最後まで流す】

【トラック終了まで繰り返して流す】
【0—10秒ほどまで流してからセリフ】

弥映、部屋の入り口で、伯母と話している。
主人公はそれを、少し離れた位置から、布団に入ったまま聞いている。

※伯母はボイスなし。主人公と同じ扱い※

〈伯母〉
「それじゃあ、本当に申し訳ないけれど……。
弥映ちゃん、よろしくお願いするわね」

●中央　少し遠い
「【少し申し訳なさそうに。
以後、伯母との会話終了まで、外用の、きちんとした印象の声で話す】
はい。一緒にお留守番してます」

〈伯母〉

「食べ物とか飲み物とかの場所は、先ほどお伝えした通りだからね。
あの子が鍵を持っていますから。好きなようにお食べください。
それから、ゆっくりお休みしなさいね。
夜はおいしいごはん作りますからね」

●中央　少し遠い
【少し笑って。
伯母の優しさが嬉しい。『お昼』は『お昼ご飯』の略】
そうですね。お言葉に甘えて、お昼はそのようにします。
【心から感謝して】
何から何まで、本当にありがとうございます」

〈伯母〉
「そうだ！　スマホの番号も、あの子が知っていますから。
何かあったらかけてちょうだいね。
夕方……六時ごろには戻りますから！」

●中央　少し遠い

「【にこやかに。
伯母がとことん好意的なのが嬉しい】
わかりました。お帰りは六時頃ですね」

〈伯母〉
「そうそう。その頃になってもいいのでしたら、何か欲しいものがあった時にでも。
気軽にかけて下さいね！　ほら飲み物とか！　食べ物とか！」

●中央　少し遠い
「【声が明るい。
内心『どれだけ飲ませて食べさせるつもりなんだ……!?』
と思いつつ、伯母の気持ちが嬉しい】
ありがとうございます。
こちらからも、何かあったらお電話します」

〈伯母〉
「じゃあ、行ってきますね。お留守番よろしくお願いします」

●中央　少し遠い
【声が明るい】
はい。いってらっしゃい」

〈伯母〉
「じゃあ結夏ちゃん！　ゆっくり休むのよ！」

〈主人公〉
「はーい……」

主人公、布団に入ったまま、伯母に手を振る。

●中央　少し遠い
【声が笑っている】
お気をつけて」

伯母、主人公に声をかけると、そのまま部屋を去っていく。
弥映、それを見送ってから、ゆっくりと扉を閉じる。

SE2　弥映が部屋の扉を閉める音
【最初から最後まで流す】
【少し遠くで聞こえる】
【小さめの音量で流す】

こうして部屋は主人公と弥映だけになり、部屋には静寂が戻る。
……と、思う間もなく、弥映が近づいてきた。

SE3　弥映の足音
【最初から最後まで流す】
【だんだん近づいてくる】

弥映、主人公の体調を案じつつも、公認で半日ほど二人きりになれるのが嬉しい。
声がうきうきしている。

●中央
「【※マークまで、心配しているが、二人で過ごせる事が嬉しくもある】

ふふふふふ。伯母さん、本当に良（い）い方だね。
【少し間をあけてから】
大丈夫〜？
見事に風邪引いたね。
ふふふふ。　※
【少し間をあけてから。
優しく、少し心配そうに】
昨日、あんだけ濡れたもんね。
【笑って。『一応、対策はしたのにね』という感じで】
帰ってすぐお風呂入ったのにダメだったねぇ」

〈主人公〉
「ダメだったねぇ……。めっちゃだるい……」

弥映、主人公の左耳側に近寄る。

●左　至近距離
「【耳に軽く一回だけキスする】

ちゅ」

弥映、そのまま左耳にささやく。

●●左　ささやき　※マークのセリフまでささやく

「【ひそひそと、嬉しそうにささやく】

でも、昨日はえっちしなかったけど幸せだったね」※

そうなのである。

昨日、バス停であんな会話をしたにもかかわらず、主人公と弥映はセックスしなかった。

普通に体調が悪くて、それどころではなかったのだ。

それでも離れて眠るのは嫌で、結局、二人は仲良く、同じ布団でくっついて寝た。

身体はだるく、頭はぼんやりして、寒気もひどかった。

それでも、そんな時でも弥映がそばにいてくれるのは嬉しくて、主人公は、とても幸せな気持ちで一夜を過ごしたのである。

それは、一晩じゅうセックスしたおとといや、その前の日とはまた違う意味で、満たされた時間だった。

弥映もまた、同じように考えてくれていたのが嬉しい。

なんだか、心が一つになれているような気がする。

●左　至近距離

「【少し間をあけてから。

※マークまで、じんわりと幸せ。昨日の事を思い出して】

なんかさ。抱き合って寝るだけなのもいいね。

【少し間をあけてから】

すごく、恋人って感じがした……。　※

【少し不安になって。

『主人公は風邪が辛くて、それどころではなかったかもしれない』と思う】

あたし一人で浮かれてるだけだったら、ごめん」

〈主人公〉

「弥映ちゃんだけじゃ、ないよ」

だから主人公は、また自信なさそうにしている弥映に、はっきりと伝える。

仮に弥映が、いまだに自分の魅力を『簡単にセックスさせてくれる事』とか『身体が女性的で胸が大きい事』だと思っているのなら、しっかり否定する必要があると思った。

●左　至近距離
「【続きを促す。主人公の言わんとしているところがよくわからない】
ん？」

〈主人公〉
「私も、昨日、すっごく幸せだった。
ずっと、昨日みたいなのでもいいなって思ったよ」

●左　至近距離
「【少し笑って。
意外で、主人公の言葉を復唱する】
ずっと昨日みたいなのでもいいの？
【すごく嬉しい。少し声が震える】
一生えっちできなくなっても、好きでいてくれんの？
【少し間をあけてから。
恥ずかしくて、嬉しくて、甘くからかう】
あんたエロいのに、そんな約束していいんだ？」

〈主人公〉
「いいよ？　どう転んでも、一生、弥映ちゃん、ラブ」

できるだけ、はっきり意思表示したいと思った。
その結果、指でハートまで作りながら言ってしまったが、まぁいい。
セリフも行動も、何から何まで自分じゃないかのようだが、全部本心だ。
それでも『いや、ハートはどうだろうか……』と不安になってきたが、これでよかったらしい。
弥映はなんだか恥ずかしそうに、照れたようにもじもじしている。
すごくかわいい。
いつも、こんな風に喜んでいてほしい。
喜ばせられる自分だったら、と主人公は思う。

●●左　ささやき　※マークのセリフまでささやく
【少し間をあけてから。少し真面目に】
ありがとう。嬉しい。
……信じるよ」※

弥映、照れくさそうに一度身体を離す。
少し離れて、主人公の左側にいる状態になる。

●左　至近距離
「【少し間をあけてから。
照れるので、話題を変える。『スポドリ』は『スポーツドリンク』の略】
そうだ。スポドリあるよ。
【優しく】
喉乾いてない？」

弥映、言うと、テーブルの上にあるペットボトルを取ろうと移動する。

ＳＥ４　弥映がテーブルの上にあるペットボトルを取ろうと、移動する音
【最初から最後まで流す】
【だんだん遠くなる】

ＳＥ５　弥映がペットボトルのふたを開ける音

【最初から最後まで流す】

ＳＥ６　弥映がコップに飲み物を注ぐ音
【最初から最後まで流す】
【小さめの音で流す】

ＳＥ７　弥映がペットボトルのふたを閉める音
【最初から最後まで流す】

ＳＥ８　弥映がペットボトルをテーブルに置く音
【最初から最後まで流す】

主人公、弥映がそのままコップを手渡してくれるのかと思い、手を伸ばす。
だが、そうではないようだ。

●中央
「【コップに注いだスポーツドリンクを飲む】
※飲むふりでＯＫです※

んっ。んっ……んっく。
【今度は、飲み込まずに少しだけ口に含む】
※含むふりでＯＫです※
ん」

弥映、スポーツドリンクを注いだコップをそのまま持つと、少し飲んでから、自分の口に含む。
そして、そのまま主人公に近づいて……。

ＳＥ９　弥映が主人公に近づく音
【最初から最後まで流す】
【だんだん近づいてくる】

スポーツドリンクを、口移しで飲ませる。

●中央　至近距離
「【口に含んだスポーツドリンクを、主人公に口移しする】
ん……♥

☆【※１０秒※　キスする。
口移しの後、そのまま、舌を入れてディープキスするイメージ】☆
★　ん♥　ふ♥　ちゅぱ……ちゅるっ♥　んんっ……ちゅ♥　ちゅ♥　ちゅ♥
【二回、水っぽいキスをする】
ちゅ♥　ちゅ♥
【早くも呼吸が上がってくる。やはりあまり体調がよくない】
はぁ……はぁ……♥」

弥映、中央の距離感のまま、ささやく。

●●中央　ささやき　※マークのセリフまでささやく
「【うっとりとため息をつく】
はぁ……♥
「【少し間をあけてから。ゆっくり、にやにやと嬉しそうな声で】
口移しって、絶対こぼれると思ったけど、意外とできるもんだね」※

●中央　至近距離
「【唇に軽く一回だけキスする】

ちゅ♥」

弥映、近づいて、左耳にささやく。

●●左　ささやき　※マークのセリフまでささやく

「【少し間をあけてから。優しく。

『風邪もひいているし、これ以上するのはよくないかな……』と思っている】

じゃあ、寝よっか」※

こうして、弥映は寝る準備をしようとするが、主人公はもうたまらなかった。

口の中に、甘いような、しょっぱいようなスポーツドリンクの味が残っている。

それから、弥映の舌のざらざらした感触が、まだ自分の舌を撫でている気がする。

もっと欲しいと思った。

だから、抱きついて求める。

ＳＥ１０　主人公が弥映に抱きつく音

【最初から最後まで流す】

●中央　至近距離
「【キスされる】
ん……♥
【少し間をあけてから。
すごく嬉しそうに笑う】
くふふ。
【少し間をあけてから。
嬉しそうに、すごく甘くからかう】
何。もっと欲しいの。もっと飲ませて欲しいの？
【少し間をあけてから。
すごく優しく】
今日は甘えん坊さんだね」

ＳＥ１１　弥映がペットボトルのふたを開ける音２
【ＳＥ５と同じ音】
【最初から最後まで流す】

言うと、弥映、再びペットボトルを取る。

それから、今度はふたを閉めず、ペットボトルから直に飲んで口移しする。

●中央　至近距離
「【今度は、ペットボトルから直にスポーツドリンクを飲む。
自分も喉が渇いており、普通に少し飲んでから、口に含むイメージ】
※飲むふりでＯＫです※
ん……っ。んっ……。……く♥」

ＳＥ１２　弥映がペットボトルをテーブルに置く音２
【最初から最後まで流す】

●中央　至近距離
「【再び、口に含んだスポーツドリンクを、主人公に口移しする】
ん……♥
☆【※１５秒※　キスする。
全部飲ませた後、濡れた唇でちゅぱちゅぱ水気の強いキスをするイメージ】☆☆
★　れろれろ……ちゅ♥　ん♥　ふ♥　ちゅぱ、ちゅぱ♥　ちゅぷ♥　ちゅぱ♥　ちゅ♥」

弥映、キスをやめると、中央の位置のままささやく。

●●中央　ささやき　※マークのセリフまでささやく
【ゆっくりと、甘ったるい猫撫で声で】
「もぉ。そんな喉乾いてたの？」※

〈主人公〉
「乾いてた……もっとほしい……♥　弥映ちゃんともっとちゅーするぅ……♥」

主人公、とろとろの声を出して、甘々におねだりする。
この数日間で、甘えるのにもすっかり慣れてしまった。
弥映が甘えさせてくれるからだ。
本当は自分も甘えたいはずなのに、一杯自分を受け入れてくれるからだ。

●中央　至近距離
【上機嫌で】
ふふふ。
【甘ったるい猫撫で声で】

いいよ？　もっとちゅーしよ。
☆【※15秒※　キスする。ゆっくりあまあまなキス。
あまり激しくせず、時折吐息を混ぜながらキスする。
風邪気味感のあるキス】☆☆
★　んっく……♥　れろっ♥　ぴちゃ、ぴちゃ。ちゅぽっ……♥　ん……ふう、ふう……。んんんぅ……♥
【三回、ゆっくり呼吸する。
早くも呼吸が上がってくる。やはりあまり体調がよくない】
はぁ、はぁ、はぁ……。
【少し間をあけてから。甘ったるく。
『大丈夫なの？　風邪』は、
『風邪をひいているのに、このままセックスしても大丈夫なの？』という意味】
大丈夫なの？　風邪」

〈主人公〉
「私は平気……♥　弥映ちゃんは？」

●中央　至近距離

「【甘くかすれた声で】
あたしは平気、だけど。
【少し間をあけてから。
少し拗ねた声で。
自分はセックスを我慢しようとしていたのに、積極的に迫ってくる主人公が恨めしい】
平気。だけど」

弥映、中央の距離感のまま、ささやく。

●●中央　ささやき　※マークのセリフまでささやく
「【少し不貞腐れたように。ぼそっと】
あんたのせいで熱くなってきた」※

言うと、弥映、胸を突き出すように前に出して、そのまま浴衣の紐をほどく。
ブラジャーはしておらず、そのまま胸が露出する。

５秒ほど間をあけてからＳＥ１３。

SE13　弥映が浴衣を脱ぐ音
【最初から最後まで流す】
【小さめの音量で流す】

弥映、中央の距離感のまま、ささやく。

●●中央　ささやき　※マークのセリフまでささやく
「【恥ずかしそうに、ぽそりと】
ねぇ……おっぱいも飲む？」

〈主人公〉
「ん……♥　飲むぅ……♥」

主人公、照れながらも大きく頷く。
もう、視線が胸にしか行かない。
弥映の胸は、この数日間で何度も見たはずだ。
なのに、いまだにまったく見慣れない。
いつまでも凝視していたいし、早く触りたいし、たっぷり吸い付きたい。

弥映の胸にいっぱい甘えたい。どうか早く、そうさせて欲しいと思う。

●中央　至近距離

「【上機嫌で。主人公の食いつきがすごいので嬉しい】

ふふ。

【少し間をあけてから。満足げに、ぼそっと】

可愛い赤ちゃんだ。

【少し間をあけてから。どうするのがいいか考えてから話す】

そうだな……お布団に仰向けになって？

【少し間をあけてから】

あたしが上、乗っかるから。

寝てるだけでお乳吸えるようにしてあげる」

〈主人公〉

「……♥」

しかし弥映はまだどこか余裕のある様子で、主人公に仰向けになるよう指示する。

主人公があまりにも欲望むきだしなものだから、それがかえってかわいく感じられてい

るのだろうか。

SE14　主人公が仰向けになる音
【最初から最後まで流す】

弥映、四つん這いになって主人公に覆いかぶさると、主人公の頭よりも少し上の位置に、自分の頭が来るようにする。
瞬間、主人公は驚いて逃げそうになるが、もう遅い。
主人公の顔に、とろけそうに柔らかいものが当たっている。
こんなものを知ってしまったら、もう戻れなくなると思った。
つまり、もう戻れない。

主人公、すぐに、でも、痛くさせないように弥映の胸を片側軽く持ち上げる。
それから自分の口のところに持っていって、優しく、はむっと口に含む。

●中央　上
「【低く小さく喘ぐ。乳首を吸われて】
んっ……♥

【恥ずかしくなる。
また、ここで、自分はとんでもない格好を提案してしまったと実感がわく。
なぜなら、覆いかぶさってる間は両手の動かしようがない。
なので、主人公の好きなようにされてしまう】
はは。やばいな、この格好。
【低く小さく、語尾が下がるよう喘ぐ。乳首を吸われて】
……あ。
【低く小さく、語尾が下がるよう喘ぐ。乳首を吸われて】
う。……ぁ♥
【ここから※マークまで、ゆっくりと少し苦しそうに、ゆっくり呼吸しながら。
句読点ごとに息をつくイメージ】
すごい……背徳的、って、感じ。
【※3回※　ゆっくり呼吸する】
はー……はー……。
はー……♥
【ゆっくりと。すごく感じているまま、何とか話す】
伯母さん、あたし達の事。
【推論する。『きっと』が抜けており、疑問形でもないが『確信』ではなく『推定』】

ちゃんといい子にして、寝てると、思ってるよ？

【低く小さく、語尾が下がるよう喘ぐ。乳首を吸われて】

……う。

なのに……こんな事……。　※

【高めに小さく、語尾が上がるように喘ぐ。乳首を吸われて】

あぁ……♥

【少し間をあけてから。甘くかすれた声で】

悪い彼女で、ごめんね」

〈主人公〉

「……いいんだよ」

●中央　上

「【三回、ゆっくり呼吸する。

やはりあまり体調がよくない】

はー……はー……。はぁ……♥

【不思議そうに。何が『いいんだよ』なのかわからない】

え？」

〈主人公〉
「だって、仮にエロいのが罪なら、私達同罪でしょ？　罰を受ける時も一緒」

主人公、照れつつも、できるだけはっきりと言う。
それはいつかの、弥映の言葉の引用だ。

主人公は、あの言葉がとても嬉しかった。
それまでずっと『いけない事』だと思っていた『エロい事』。
だけど弥映は、それは悪い事ではないし、仮に罪だとしても、その時は自分も同罪だと言ってくれた。
嬉しかった。本当はあの言葉に救われていた。あの時にはもう、弥映の事が好きだった。
だから今度は自分が言いたい。
弥映とする事は、全部対等に背負いたい。
現実には難しい事もあるかもしれないが、その気持ちだけは強くある事を主張したかった。

●中央　上

「【主人公の言葉が、以前の自分の発言の引用であると気づく】
あ。
【納得する。また、嬉しい。
主人公が、以前の自分の言葉を引用してくれたのが嬉しい】
ふふ。
【ゆっくりと。気持ちよくてうまく話せない。
だが、ニヤニヤと嬉しそうに】
そうだね。あたし達。同罪だ。
【甘ったるく。
『悪いカップルだね』は『自分達は悪いカップルだね』の略】
悪いカップルだね……♥
☆【※２０秒※　喘ぐ。
吐息メインで喘ぐ。声を我慢する必要はないのに、頑張って耐えているイメージ】☆☆
☆
★　はぁ……はぁ……はぁ……。う。ふう。あ……♥　……うっ♥　はー……はー……はー……ぁぁ♥　ぁ♥　くっ……♥　う♥」

〈主人公〉

「……♥　……♥　……♥♥♥」

主人公、夢中で弥映の右胸にしゃぶりつく。
この体勢では、弥映は両手を自分の身体を支えるために使うほかない。
だから、主人公の好きにされている。
上に乗られているのに、主導権が自分にあるというのは不思議な感じだが、すごく征服感がある。
主人公、吸っていない左胸をやわやわ揉みしだきながら、この状況を堪能する。
柔らかくて、重くて、すべすべで、しっとりしていて……すごい。

●中央　上
【三回、ゆっくり呼吸する】
はぁ、はぁ、はぁ……♥」

〈主人公〉
「……弥映ちゃんのおっぱい、すごい♥　重いぃ……♥」

●中央　上

「【余裕があるように装うが、ものすごく気持ちいい。
また、両手の自由が利かないせいで、その不自由な感じに興奮している】
ふふ……。
【甘ったるい猫撫で声で】
おっぱい重い？
【少し間をあけてから。
甘ったるい猫撫で声で】
重いよ？
【※マークまで、ゆっくりと少し苦しそうに。
ゆっくり呼吸しながら。句読点ごとに息をつくイメージ】
Gカップの乳って、片っぽ一キロ以上あんだよ。
【三回、ゆっくり呼吸する。
語尾が下がる】
はぁ、はぁ、はぁ……♥
【少し間をあけてから。
だんだん声が高くなる。気持ちよすぎて】
ずっと、目立つだけで。邪魔だと思ってたな。
【元の高さに戻そうとする】

でも……あんたは大切にしてくれたね。　※

【照れ笑いして】

ふふ。

【甘ったるい猫撫で声で】

好きな風にしていいよ……♥

☆【※２０秒※　喘ぐ。

吐息メインで喘ぐ。先ほどよりもガチっぽく、声が低くなり『う』段の喘ぎが増える。

やはり、声を我慢する必要はないのに、頑張って耐えているイメージ】☆☆☆

★　はぁ……ぁ。ぁ。う……。ん♥　う……ぁ。ぁ。はー……はー……はー……ふぅ。はー……はー……あぁ……。ぅ♥

【甘ったるい猫撫で声で。

主人公の愛撫がものすごく気持ちよくて、おかしくなりそう。

『ねぇ。なんでこんな上手くなってんの……？』は

『なぜ、こんなに短期間でこんなにセックスの技術が向上しているの？』という意味】

ねぇ。なんでこんな上手くなってんの……？」

〈主人公〉

「教えてくれた人が良かったんだよ……♥」

●中央　上

「【主人公の言葉を復唱する。『仕込んだ』は『教えてくれた』という意味】
仕込んだ人が良かった？
【語尾が下がるように笑う。
余裕があるように装うが、ものすごく気持ちいい】
ふふ。
【※マークまで、またゆっくりと少し苦しそうに、ゆっくり呼吸しながら。
句読点ごとに息をつくイメージ】
ほんとはねぇ、やった事ない事も、普通に教えてた。
色々知ってるみたいなフリして。偉ぶってただけなの。
【少し間をあけてから。
甘ったるい猫撫で声で話しているが、本当は不安】
信じる……？」※

〈主人公〉
「信じるよ。弥映ちゃんの言う事、全部信じる」

言うと、弥映がホッとしたように笑った。
もしかして、これまで主人公に『遊んでいる女』だと誤解されていた事が、よほどショックだったのだろうか。
主人公はそれを、とても申し訳なく思う。
同時にこれを、二度と繰り返すまいとも思う。

だって、今ならわかる。
主人公が弥映を疑ってしまった原因、それは、弥映の態度が問題なのではない。
己の自信のなさが問題だったのだと。

主人公はこれまでずっと『弥映のような人が、自分だけを愛してくれるはずはない』と不安だった。
すごく年下だから。
すごく美人でもないから。
すごくお金を持っているわけでもないから。
その他においても色々な意味で、釣り合っている気がしないから。
主人公はそうやって『好かれない理由』を探しては、それを集めて『この恋がうまく行かない根拠』にして。

そんな自分を冷静で、客観的な分析ができる人間だという事にして。
ありもしない事を妄想して、弥映を傷つけた。

……確かに、にわかには信じがたい事ではある。
弥映は美人だし、話しやすいし、頭もいいし、優しいし。
だから『色んな人が弥映に群がって、弥映は選び放題だったに違いない』と想像するほど高く評価したり『それほどまでに素敵な人だ』と認識したりするところまでは間違いじゃない。
……でも、弥映は言った。
『本当はコミュニケーションが苦手で、だから他者とうまくやっていくために、明るくてフランクな女性を演じてしまう』と。
『初めての相手は、主人公だ』と。
だったらそれを主人公は信じる。どれだけ信じがたい話でも信じる。
そもそも、自分達の関係は、数々の『ありえない』で構成された儚いものだ。
当事者の主人公が『いいや、ありえる』と信じなければ、簡単に壊れてしまうだろう。
だから信じる。
それほどまでに弥映が好きでこの恋に本気だと、弥映にわかってもらうために、信じる。

●中央　上

「【甘くかすれた声で。すごく嬉しい】
へへ。ありがとう……♥
【少し間をあけてから。
甘くかすれた声で。すごく嬉しい】
大好きだよ。
☆【※１０秒※　喘ぐ。
吐息中心だが、だんだん我慢できなくなってきて、『あ』段で可愛く甘々に喘ぐ】☆
★　ぁ……♥　ぁ。ぁ……♥　う♥　はー、はー……う♥　ぁぁ♥　ぁ♥　ぁ♥
【高く、とろとろの甘い声で】
う。すっごい、いいっ……♥
☆【※１０秒※　喘ぐ。
吐息中心に、低く、持ち直そうとする。『う』段で、ガチっぽく喘ぎ】☆
★　う……う。ぁ。ぁ……♥　ぁ。ぁぁ……♥　う♥　うっ……く。う……♥
【※マークまで、高く、ゆっくりとろとろの甘い声で】
はぁ。気持ちいいよ。
すっごい感じる。
ねぇもっとして？　もっと。ね？　※

【三回、ゆっくり呼吸する。
語尾が下がる】
はー……はぁ。はぁ……♥
【低く、イかないように耐えてる】
んう……♥」

弥映、気持ちよすぎて耐えられなくなり、無意識のうちに、身体をずらして逃げようとする。
それを、主人公は捕まえて、もう逃げられないようにする。

SE14　弥映が離れようとする音
【最初から最後まで流す】

SE15　主人公が弥映に抱きつく音
【最初から最後まで流す】
【やや大きめの音で流す】

●中央　上

「【驚く。抱きつかれて逃げられなくなる】
あ……！
【高めの声で、かわいく喘ぐ】
あー……ぁ♥　ぁ♥　ぁぁ……！
【低めに喘ぐ。
声を我慢しようとするものの、耐え切れずに甘々に】
う……んっ♥　あぁ……♥　う♥　うっ……う♥　うぅ♥
【ゆっくり呼吸する。しかしすぐに再び喘ぐ。
必死に声を我慢しようとするものの、うまくできない】
はぁ……はぁ。あぁ……♥　ぁ……♥　あぁ……♥　ぁ♥
【低めにガチっぽく喘ぐ。ものすごく感じている】
あ。う♥　うっ……く。うぅ……♥
【※3回※　ゆっくりと呼吸する。何とか話そうとする】
はぁ……はぁ……はぁ……♥
【高く、とろとろの甘い声で。
『いいよ』は『気持ちいいよ』の略】
いいよ。すごい、気持ち、いい……♥
【甘ったるい猫撫で声で】

こんなの、されたら。戻れなく、なっちゃうかも……♥

【低めに、ゆっくり、耐えるように喘ぐ】

ん♥　ふ♥　んぅ……♥

【少し休ませてもらおうとする。

だが、途中まで言いかけたところですごく気持ちいい強さで乳首を吸われてしまう】

待って、ほんと、

【低めにガチっぽく喘ぐ。めちゃくちゃ気持ちいい】

あぁっ……♥

【※5回※　ゆっくり、荒く呼吸する。だんだん語尾が下がる】

はぁ、はぁ、はぁ。はぁ。はぁ。

【ふいに気持ちよくされて吐息喘ぎ。語尾が上がる】

はぁ……♥

【低くあまあまの声で必死に。先ほどの続きを話そうとする】

ほんとイくっ♥　イッちゃう……♥　イッちゃうからぁ♥

【低めに、快感に耐えるような声で】

おっぱいで変に、なっちゃう。なっちゃうからぁ……♥

【小さめに、低めにガチっぽく喘ぐ。ものすごく感じている。イくのを必死にこらえている】

※大きい声にならないようにお願いします※

あぁーっ……♥　あぁーっ……♥　あー……♥

【特に小さめに、低めにガチっぽく喘ぐ。イきそうなのに耐える】

あ。あ。あ。くぅぅ……♥

【※6回※　少し早く、荒く呼吸する。だんだん語尾が下がる】

はぁ、はぁ、はぁ。

はぁ、はぁ、はぁ♥

☆【※30秒※　喘ぐ。

低く、喘ぎと吐息同じくらいの割合で、余裕なく喘ぐ。

可愛く喘ぐ余裕はすでになく、低い『あ』と『う』段中心になる】☆☆☆☆☆

★……う。あ。あ……♥　あーっ。あ……♥　う♥　あ、あ、あ。はー、はー……う♥

あぁ♥　あ♥　あ♥　うぅっ……う♥　はぁはぁはぁ、はぁはぁはぁ。……あ♥

【イきそうになる。

『待って』と言おうとするが言えない】

待っ……♥　あ♥

【低く。可愛く喘ぐ余裕がない】

イくっ。イっ……。あ♥

【ここでイく。

低く、こらえれない感じで】

ううううっ……♥

【低く。もう一回気持ちいい波が来る】

あ♥」

SE16　弥映が主人公の横に倒れ込む音

【最初から最後まで流す】

弥映、のしかかっていられなくなって、主人公の横にぐしゃっと倒れ込む。

主人公の左耳側に頭を寄せて呼吸する。

SE17　弥映が主人公に近づく音

【最初から最後まで流す】

●左　至近距離

「【※6回※　早く荒く、でも気持ちよさそうに呼吸する】

はぁはぁ、はぁはぁ、はぁはぁ。

【※10回※　苦しそうに、でもとろけた呼吸をする】

はーっ、はーっ、はーっ。

はーっ、はーっ、はぁっ……♥
はーっ、はーっ、はぁ。
はーっ……♥」

SE18　主人公が弥映に近づく音
【最初から最後まで流す】

●中央　至近距離
「【キスされる】
ん♥
☆【※15秒※　キスする。受け身。
イッたばかりなのに容赦なく、たっぷり吸われる甘々キス】☆☆
★　んーっ……♥　ん♥　く♥　んんぅ……ちゅ♥　んーっ……ん♥　んぅ♥　ん♥
ちゅ♥
【※6回※　ゆっくり、苦しそうに呼吸する。
気持ちよすぎて、ほとんど涙声になってる】
はぁ、はぁ、はぁ。
はぁ、はぁ、はぁ……♥

【気持ちよすぎて、語彙がなくなっている】
すご。
【少し間をあけてから。
気持ちよすぎて、語彙がなくなっている】
やば……♥
【※6回※　苦しそうに呼吸する。
まだ気持ちよすぎて、話せない。ほとんど涙声になってる】
はぁ、はぁ、はぁ。
はぁ、はぁ、はぁ……♥
【しばらく間をあけてから。
やっと話す余裕が出てくる】
もぉ。ほんとにおっぱい大好きだね」

〈主人公〉
「おっぱいじゃないとこも好き……」

●中央　至近距離
「【キスされる】

ちゅ♥

【少し間をあけてから。甘ったるく。主人公の言葉を復唱する。本当はそんな事はわかっているが、言わせたいし、聞きたい】

おっぱいじゃないとこも好き？」

〈主人公〉

「好き。大好き。中身も見た目も全部好き」

主人公が必死に訴えると、弥映の顔がまた近づいてくる。

●中央　至近距離

【キスする】

ちゅ♥」

唇が離れて、弥映と目が合う。

泣きそうな顔をしているから、もっとはっきり伝えたくなる。

〈主人公〉

「ずっと一緒にいたい。私、ずっと弥映ちゃんのそばにいたい」

その時、弥映の目から涙がこぼれた。
主人公はそれを見て、今まで、少しでも弥映の気持ちを疑った事を悔いる。
もう二度とこの人を離さないと思った。
それがどんなに難しい事でも、主人公はやる。
もう二度とこの人を淋しくさせない。本気でそう思った。

●中央　至近距離
「【少し間をあけてから。
涙声で、声が震える。
※マークまで、甘ったるく。ものすごく嬉しい】
※泣いていますが、あまり大げさにならないようにお願いします※
あたしもだよ？
あんたの事全部好き。
優しいとこも、ばかなとこも。
いつも助けてくれるとこも、エロいとこも、全部大好き。
ずっと一緒にいたい……♥　※

【甘々にキスする】

ちゅ♥」

また唇が離れると、弥映が泣きながら笑う。
きっと、主人公も同じ顔をしている事だろう。
大丈夫。きっと自分達の気持ちは一つだ。そう思えた。
先の事はわからなくても、その確信があれば頑張れる。
どんな問題があったとしても、この手を離さずにいられる。そう思った。

●中央　至近距離
「【甘くかすれた声で】
だから、さ」

薄暗い部屋の中で、弥映が甘くかすれた声で誘う。
それは初めての夜に似ていたが、あの時よりもずっと、心が近い。

●中央　至近距離
「【※マークまで、甘ったるい声で誘う】

※特に聞き手をドキッとさせるイメージでお願いします※

今度は一緒に気持ちよくなろ？

おまんことおまんこ、くっつけよ。

あんたの事、一杯感じながら気持ちよくなりたい……♥」※

ここでフェードアウトして終了。